

仙家秘術

全

ヲ 4

3071



禁他見

仙家秘術

全

源國軒藏



○ 石に文字とよめる法

石に文字とよめるんとありて、檀越の腹と書き、より  
すせとていへる石に文字と書き此石とせりげ、投金  
六十日とて埋めおし、よりに文字を厚く深く洗ひて  
よりてよめるよしなり

○ 晒帷子の垢を洗ひ白くする法

夏の日向雨ユラケ乃時雨の水と桶に洗ひて、よりとて洗ひて  
垢をよき去りて色白く成るなり

○ 法人年産とよめる法

此法何れ乃難産にて、より年産とよめるなり、より紙

鬼女鬼女子成就

かくの如く同じ書上包こ常の如く封して表に所守と表の封しめに安と一字書こし秘中の秘あり

○ 雷の居る札之事

襖ツヤウ芳舎ハウシヤと云く天井に中棹ナカササを挿し挿雷ライ雷ライ報ホウ聖セイ電デン降カ電デン謝シャ大雨オウウ念ネン彼カ親シンて力リキ應オウ時ジ得トク消シユウ散サン此文とせへん

○ 盗人とあらはれ法

去年一季キネン徒ト形ケイ供キョウへるス昆クニ布フと黒クロ統トウして酒の中へ入イるルはハとトうウいイるル人々ヒトトにニのノ手テにニ盗トウてるルそのソノ忽トウ頬ホウ腫シュウるル子コがガなり

○ 針の皮雷に挿入ると拔法

一 酸サン毒ドクと黒クロ統トウして温ユメカ湯ユまで飲ノへ上ウにあれが食ク後ノチはハ一ヒト杯ハシのノ酒サケをシ飲ムみミてテ顔オモテにニ痒ユキきキるルはハ良ヨシえエいイちチ振ヒりリあアるルはハ久キウしシ久キウとトつツるルはハどドとトいイふフはハ

○ 饑ウエと除く方

一 大豆ダイズ皮ヒとト煮ニくクはハ良ヨシいイ三さん遍遍蒸シユくク 大オホ麻マ子コ 三さん外外水水にニ一ひと夜夜浸シユすス 右ミダリ二ふた色いろくく搗ウきキ候トキのノかか丸まるをを籠かご入いてて初はつ夜よりり煮ニきキてて煮ニくクはハ良ヨシいイ時トキにニ籠かご入いてて出ですス 一ひと日ひのノ書カキ晒ヒくクはハ良ヨシいイ粉こなとと飽あままりり食クへヘ 一ひと切きりりのノままとと食クへヘはハ初はつ一ひと夜よ飽あままりり食クへヘ 七日ななししららぬぬどど又また七日ななししららぬぬはハ良ヨシいイ

飢つても又四つありぬとて食らぬ世に二三日飢つても  
日ごとく食ふれば二三四日飢つてもいひまておいは湯に  
常に二麻子水湯とりのむぐ一若常のくく食ふ人とは  
つゝ冬葵子三合と粉こして湯をどく一は中して腹を  
づゝ虫の葉全の色のくくにして大便くちらなり  
まほい常の如く食ふと通く少く害か一出るを判  
せむは肝強く赤色くくして焦悴らるゝなり  
五ヶ月、農書にふつたり

或人此方のかくしてたのりつるに能く法のよきと  
飢とのやうくして少く書ありと云り

○ 千里飛行散

一 前蘇 防風 草烏頭 細辛 藁本  
石虫味細末一々軍履草鞋乃うらにめななり  
ゆくとくたぐれはゆくとくは道とあつても草  
研るる

○ 髪と黒くく一え澤とあひ法

一 酸漿草<sup>スルメ</sup>草<sup>クサ</sup>まで大豆と煮けとをえ髪にあらく川やど  
て漆のくく  
又塩乳香と胡麻の地入七りおきて髪に搦るに早  
黒くああり

○ 松葉煙草拵法

一 青松をあととら葉のえと去り水はくはひ古酒を一夜浸

一、おもく一、急流に入ると流のよにうねりおこすなり  
平らなる所の急流を避けて深き淵に和らぐ一、又極に二、時中り  
浸して急流を避けしめて陰乾す一、又石のよにうねり  
うねりおこすなり一、極に別徑の急流のよにうねりおこすなり  
急流のよにうねりおこすなり一、極に別徑の急流のよにうねりおこすなり  
急流のよにうねりおこすなり一、極に別徑の急流のよにうねりおこすなり

○ 所見の道具と云いざして川の幅を尋ねば  
たゞ川の急流とに臨みては川の淵とを尋ねば急流を尋ねば  
の急流とに臨みては川の淵とを尋ねば急流を尋ねば  
して急流の淵と急流の末と向ふの川急流の淵と急流の末と  
一急流の淵と急流の末と向ふの川急流の淵と急流の末と

引ぬ一、又急流のよにうねりおこすなり一、  
て急流のよにうねりおこすなり一、  
川の急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、

○ 急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、  
急流のよにうねりおこすなり一、

○ 四か一色付やうに秘傳

一 一斗の銅甲から鉛一分を板甲からと云此色を葉乃法  
 一 硫黄ニ指月 生垣十月 煆硫二月 丹礬二月 礬礬二月  
 若葉の砂をこき甲から一つけが色を白太水を見流し  
 一 一斗の砂をこき甲から一つけが色を白太水を見流し  
 又まき成るなり

○ 針鑿の法

一 錫をこき金の器物 針のこれしりもとびあすに  
 ヤスリ粉の足すず濃石 ころり 太水を見流して是  
 の流り分る 大なる穴は松の葉をこきこきよりりて是  
 の葉流り分る 針は引け行え湯といふなり法し  
 の 日本煆針仕極の法

一 一切羽ツキ 等下地 銅なり とも 錫なり 清山なり へみ ぎき 後梅  
 砂とろく引けろくもそよるあまより水銀溜るやに  
 引ハころりうのく引梅金え 七限え 七箔え ころり唐  
 綿え ころりより押けるをいづんころりね又水銀乃  
 性ろく成るる時さーおのろく砂え 竹又金え 七限  
 ころり七箔とさせころりんん ころり七箔とさせころり七箔とさせ  
 おろりころり時火とさーおろりころり火のよにまこところり  
 洞をこし合圖なり ころりころり入るをねころりころり棒え みろり  
 ころり金え 七箔とさせころり限え 七箔とさせころり七箔とさせ  
 ころり金え 七箔とさせころり限え 七箔とさせころり七箔とさせ

一 鑿棒の圖



○ 赤銅色竹葉の法

一 赤銅セウドウ湯ユを以て水柄ミヅカを以て色竹シキタケを以て浸ヒツかす花とみぢを  
梅ウメはげしげに乾ヒ之レトシ使シけと画エけり相ア十シと前メより  
ナラ緑キナンド青キナンドと羊ヒツ卵ヒツと水ミヅの合カヘを衣ヒツ卵ヒツと水ミヅの合カヘを以て浸ヒツかす  
を湯ユのちのけと入イつむと何ナニれと何ナニれと日ヒトらちりて  
り浸ヒツかすれは使シけの色シキを以て浸ヒツかす使シけのつむむは使シけの  
百ヒャク影カゲ根ネ 秦シン花カ 二色ニシキ粉コりて衣ヒツ卵ヒツと水ミヅの合カヘを以て浸ヒツかす  
香カを焚ヒツかす熊クマぶねの氣キを悉シツくあつ又マタ者モノ二ニ重ヘと湯ユを以て  
浸ヒツかす一ヒツ此コノ業ノ法ホウ也ナリ

○ 陰頭風法

一 烏頭ウダウを以て水ミヅに浸ヒツかす此コノ水ノと使シけの法ホウ也ナリ  
一 分ヒツりて風カゼみする法ホウ也ナリ

○ 蠟ロウ蛇ヘビの法ホウ

一 雄オス黄ワウと蒜シ正シヨウより用ヨウせ丸マト山サン柘セツ入ニルる何ナニ懐ク中ノにおど一ヒツ蠟ロウ  
蛇ヘビを以て水ミヅに浸ヒツかす此コノ業ノ法ホウ也ナリ  
一 急キウを以て法ホウ也ナリ

○ 使シけの法ホウ

一 側ソバ柏ハク葉ハク法ホウ 梔シ子コ 三サン皮ヒと青キナンド 胡コ梅ヒ 二ニ皮ヒ  
者モノを以て水ミヅに浸ヒツかす此コノ業ノ法ホウ也ナリ  
一 水ミヅの濁ニルと死シする人トと法ホウ也ナリ



一 正乃大指の屈伸も人の生活まづ〜  
と異なり吹くまづ〜  
勢の〜水と吐く生活ス

入用門

○ 墨云流の仕方

一 唐の物も水と入墨に松脂の粉とサ〜  
後その墨とついでたのもお存のよ竹の墨と  
お筆と水とついでたのもお存のよ竹の墨と  
墨も〜く〜り〜損保と〜く〜を〜上〜の〜ひら〜  
あ〜が〜自〜や〜墨流れ〜り〜損保と〜ち〜ら〜め〜  
笑い〜一〜筆の〜ゆ〜つ〜水の〜流〜つ〜  
能く〜に〜流〜と〜浸〜

一 石磨ふ〜り〜  
指も水についでたのもお存のよ竹の墨と  
墨も〜く〜り〜損保と〜く〜を〜上〜の〜ひら〜

○ 石磨ふ〜り〜

一 生熟を〜る〜  
から〜き〜た〜ら〜磁器物〜の〜  
粉と水と〜り〜合〜つ〜が〜丹土黄土〜色と〜  
又山方獨頭菜〜の〜根と〜粉と〜  
の〜あ〜と〜つ〜

○ 桐油漆の法

一 荏の地と外と八分と一丹をいれ他の色黒くあり  
たつ時火を去りてすしーまじりー終り奥の色たすも  
塗るるふ合せ漆ぬりの如く刷毛にて一遍ぬりて  
又一層ぬりてすしー

○ 玉合ぬりーの法

一 赤の藤粉、青の藤粉、黒く、藍の玉、花、黄の膏、合にはあ  
り他の油と漆とをいれ生じむらむらむらに川口ふ干  
し油をぬりたるはあうるーとすうら表よりぬり入り  
てすしーと玉合ぬりと云

○ 金銀焼竹の仕立の法

一 本朱くろめ漆に研砂とサー入摸樣と去金泥の文を  
すしー竹皮を破り絶えすしー梅砂をけりぬり漆ぬり  
炭とすしーの如くすしー古きぬりの如くすしー漆ぬり  
すしー化すしーの如くすしー地とすしーの如くすしー架地漆ぬりすしーの如く  
本朱黒の漆に研砂とサー入るの如く合せ漆と去竹  
竹皮ぬりの如くすしー炭皮とすしーの如くすしー

○ 碑字の法

一 白炭、白炭、白炭とぬりすしー能すしー二色の目すしーに細砂二  
分又能すしーの如くすしー炭砂とすしーの如くすしー  
濃墨の如くにぬりすしー文とすしーの如くすしー

白炭

炭

細砂

白炭

各等

わろ又し〜のころ〜て茶の形と揚いでれが白まゝある  
り〜まうはやくとむく人とあつて唐蠟とさうぶ〜

○ 朱墨の合せりの法

よきの支の糸とありあつて黄糸を流〜してふ〜と  
は押とのことと膠とを調合するあり

○ 牛肉墨の法

たの礫をまよふ油礫をまよと粉に〜して草麻子油と  
〜を移り合やみぬきの艾をまぜ合を結知つみ  
結い目と〜して入まかり

○ 伽羅の油の法

黄蠟チロウ百月 木の膠チロウ廿五々 此二色〜して〜成程油を法チロウ

ホ〜丁子セキ 耳松セキ 白檀ハチ 龍眼ホウキト

梓脂ササ 右虫色と成程細末〜して合油かたし  
ひらりあり

又法

唐蠟五十月 胡椒地 三十月 右の油と濁のうは濁を合

あ〜油の知と〜しおゆは〜檜の葉と二枚入〜油

つげのぬく〜と布〜して漆〜地〜と火氣と〜

耳松 龍眼 麝香 丁子

右四味細末〜してぬ〜と紙〜したる油中入〜  
油の中へ氣い〜て入りカス〜紙よ強〜り

又法

一 黄蠟 去らざるなりと待對して並たると六月五日と  
りらハ蠟六十三四年一 去らざるなりと六月五日と  
成ると松脂もサ一合が一 梅蓋茶碗の水と入る  
まゝのあまみり液してほいと遊りうるが一

○ 白い玉の法

一 沈香 十月 白檀 十月 乳香 五月 唐時香 五月

べせうへ、下り、伽藍の油と用エ伽藍の油は、この油と唐の土  
三々、唐時香五ト、熟脂五ト、四品、油、合、同、か  
あんづ、むき茶油、熟香油、二々、唐時香、五々

○ 花の露

一 熟脂 五月 花の露 五月 此二色と胡桃油 五々 入く能く  
白檀 十月 細いふみ油 二十月 二々 入く 主筋、色み

を、なり、白檀とより押ゆりと月の唐時香、す、油、四々

へ、五々、熟脂、白檀の油と合し、油、も、あり

○ 金化粧した

色と白く引ききめと一、花の油

一 唐土 十月 熟脂 五月 酒水と等々、合、此の唐の油と  
合し、一夜、油、い、水、綿、考、色、に、成、此、水、を、捨、て、又、酒、と  
水、と、等、々、合、此、と、入、し、何、日、も、水、を、替、へ、二、日、に、干、  
細、末、一、して、此、目、二、二、年、乾、粉、二、二、年、金、箔、五、枚、右、合、ま、

○ 所の中へ蛆の生ぜざる法

一 葶菜 一抱と一匁の中へ投入し、一抱の蛆の生ぜざるがゆ

○ 餌を白くする法

一 白附子 蜜陀僧 茯苓 胡椒 白芷 桃仁 桑葉

右細末にして乳けりてまた夜野するす面にぬるなり  
早朝より湯に洗るごとし十日半りして赤色玉の如く成り

○ 船中にくさ方角を知る法

磁石ありやれば授け海ととのる人ハ廿方と云ふ  
りし物らやれり方角に云ふはこふ方の磁石乃  
信と云ふなり

一 船とのりもえよふ時其船の艦を南へ北より其小磁石を  
みりてむとて一板にのえとて船のろくぬたあはれりけり  
此とに其の磁石とてまをぬ磁石の世と云ふの乃ちけんと  
思ひ磁石のぬえの世まへるなりしに北とありて一板に  
けり舟のより細末の成りてに北と備りて一板に  
より其の世もりりしに北と云ふも遠くありて

○ 鯨魚狩の法

一 鯨魚狩の法は海をめぐりてまきよし夏の日にむとむ  
つらむとてしめり

○ 昇有糸の法者より其因久を狩りて

一 密林の花をとり降平にしておしめて其最の此糸肉と者  
しつ所なる形一七んとくを多れは月夜もも招きよるなり  
又ほりて人の世に云とて少し中り入る者もしよ  
ぬりてん世に云

○ 雨の火焼くしるの法

一 常の火をたき炭を沸し中へ能く入りしり  
かして火をたれがやうに火をたきし

余所の火の明りとちりねぬ

梟のおの茎ツカキ白シロととくみぐさ茶うの心ココロととる水  
根とてい入口ととく寒サムイさ行布と拵ツクリ一ヒトあまたとよのま  
べし向ムカり火ありあし此ココ秘明とあてぐくは等ヒトさあ  
てしめりうも色いこの秘明ありては能く好ヨクく此ココ一ヒトさ  
又紙一ヒトをにしてしぬとてされい走り始ハジメらぬ  
又此の秘明とくらうとあてて急イソく走りてしめりあさ  
おの茎ツカキ多オホたふらんと走りてしめり

○ 風前燭カゼノマタの法

乾漆 海金砂 硫黄 塩硝 各ヒト一ヒト 磨ヒキ青 二ヒト一ヒト  
唐紙カラシ 黒く染ゆる布と拵ツクリしてしめ

た七色とん磨青と火とを溶し紙とちりぬめげたる時  
ちの葉ととみりや入古き布ととよほひのかりして葉と  
に包みしる縄のせふふりしてちりぬめげたる時  
走り下りて此ココ秘明と拵ツクリしてしめり

○ 乾漆の法

乳香ゴウキウ 硫黄リウウ 松脂ショウシ 乾漆カンシ 各ヒト一ヒト 墨スミ 漆シ の形カタ 四ヨ一ヒト  
塩硝エンシヨウ 各ヒト一ヒト ちの葉ととみりや入古き布ととよほひのかりして葉と  
に包みしる縄のせふふりしてちりぬめげたる時  
走り下りて此ココ秘明と拵ツクリしてしめり

○ 一寸蠟燭イツンロウの法

唐紙カラシ 松脂ショウシ 槐カヅの花ハナ 各ヒト一ヒト 浮石ウキイシ 四ヨ一ヒト  
各一知ヒトりちりぬめげたる時  
走り下りて此ココ秘明と拵ツクリしてしめり

石の脈をよとじ近きむらど能くむくし煙をまき火を  
燃しよと一口一夜は僅一寸むらど能くむらなり

○ 火をくすしむらなり

胡梅を火にくべむら能く火ありしむらなり  
口埋みむら四五日し減ど火をむら

○ 馬乃ははるをむらなり

白く風仙花の根葉とむらにむらみ湯をむらむら  
膏の膏のむらむら馬をむらありむら眼乃四五日  
のむらむら

○ 凍星の草

五月のむらの子の根は苦甘とむらむらむらむら

のむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○ 肺腫の草

葱のふらむらと火をむらむらむらむらむら  
いゆるむら

○ 蛭子のむら

古き壁乃石灰とむらむらむらむらむらむら  
密をむらむらむらむらむらむらむらむら

○ 白癩のむら

硫黄と生薬のけむらむらむらむらむらむら

○ 癩風のむら

茗荷 明礬 硫黄 丹 丹 丹 丹 丹 丹 丹 丹

すりばち

○ 疱瘡乃タリリノ垢

一 疱瘡乃タリリノ垢ノ窟ハウケツクシシモ鵝印の白ニシテ

○ 疣子黒痣とめく草

一 灰と石灰と等しくよんやれそこよこ中ノ糝子もと粒  
まじり梅炭を揉みくわしちよこあり種よくまじりよれり  
糝子水垢の垢成るきこきとまじりていざすりばち二層  
けいふをぬきこおりにハなぐけん  
○ せがのまじりるをゆき草

一 竹取のそげまじるはも松のみどりとりけり

又矢の根或ハ汁乃まじるはも蟻蛸とそらいはゆり  
まじりてけりけり

○ 夜ふりけの呪

一 九ら九りけたのよた乃もの申指えよのり我是鬼  
こころとまじりて固く握りけり

○ 糞よむいれぬ法

一 辰砂小塊と頃イシキとまじり辰砂ハぬきりりるを  
けりぬすけり

○ 逃走しるを止む法

一 ちがゆる人の衣服或ハ帯とちり紙・硫石と包ミ衣感  
ハ帯ヨ入れ井の中ノ熱ケまじりばし人帰回し



又怯るる人の草鞋と竈乃布と針と打ち  
まばら人をまばらりくばあつづりくまらる

○ 時疫の家ユリ法

太極のりり時太のよの中指して坎の字と云ふよ  
と圓く抱りてりり〜付律るま〜

○ 瘡と云ふ止法

梨一ツを南ノ方へ向イテ氣を一口吸いし梨と呪ふ〜  
南ノ方有池池中有水水中有魚三頭九尾不食人間  
五穀一惟食瘡鬼〇と三遍唱〜 梨よと吹よの  
梨、勅殺鬼ノ二字と云々祭る日乃あり人ノ食〜  
む〜〜と云るま〜

○ 齒ノ痛と止る法

海ノ指の方へ海に咒を書きだんご七をド〜  
〜と云字ノ呪と根乃る〜あ〜お付ま又咒を七人  
唱ふればま〜ソ〜を〜呪〜

虫、是江南虫

卻未喰我牙

釘在椽頭上

永世不還家

如此二行、書〜

○ 小兒ノ夜啼と止る法

一 天皇皇 地皇皇 といふ六字と竈乃布を  
おけか  
夜啼止る事〜

○ 蛇をむ〜と避る法

五月廿の午の時、御儀を二字とて家程、根り  
倒、張るる

又、佐小、死瓦、御儀、去、存、ま、ま、げ、蛇、畏、く、去、ん  
又、山林、入、時、口、門、儀、去、念、ぶ、蛇、魁、の、薪、を、

。 蝦、蛇、を、避、け、法  
五、り、の、午、の、時、御、茶、ノ、字、と、事、砂、を、去、根、倒、

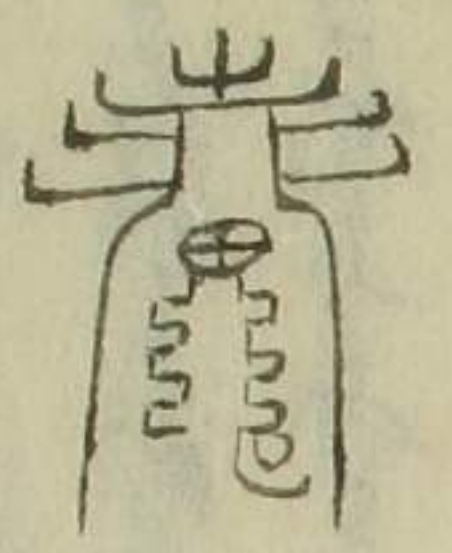
又、わ、懐、ノ、水、を、雲、と、研、り、霧、の、字、と、去、四、方、に、柱、と、に  
然、く、一、時、あり

。 口、を、わ、ら、り、竹、と、法  
指、し、地、の、か、ら、に、なる、布、王、の、字、と、去、王、の、字、の、ま、申、乃

お、を、お、り、さ、わ、ら、り、お、つ、け、し、ば、怪、念、り、

。 蜂、を、螫、れ、る、と、法、も、口、を、れ、る、と、法、も、  
地、と、た、竹、と、を、丙、丁、と、三、字、と、去、口、の、内、を、念、り、  
七、遍、と、上、と、お、り、を、螫、れ、ら、あ、い、ま、り、竹、と

。 厭、百、怪、符



凡、人家、一、切、不、測、る、怪、あり、ハ、朱、に、く  
此、符、を、御、去、怪、あり、お、法、ぶ、  
又、此、符、を、男、ハ、左、乃、神、女、ハ、右、乃、神、口、ハ、入、法、ぶ、  
怪、を、滅、し、狐、狸、乃、お、法、ぶ、る、る、

。 咽、喉、骨、の、ま、て、ろ、と、去、ル、咒

骨、の、ま、て、ろ、人、向、い、服、指、を、さ、り、め、ら、り、け、お、づ、れ、お、口、と、め、

いのお口をうらむにけて服袴ハカマへ——柄カ頭カを如カてめらげ  
いる服袴とこそ一——忽ヒト思ヒトめらふのよし

○ 切カぬ紐ヒモ金カネ三ミヤヤとてなむと名ナ分ワれハ儀ス 但タ金カネうら

ろくろと能タくタぬタるタ——卵タマゴをタぬタるタ箱ハコうウ金カネのカとカうカに  
ぬるやうであぐりけけがうきりやとあはづアらラぬヌぬヌ水ミヅ入イ  
てそろくとあはづアらラぬヌ色イロよヨくクいイてテあ

○ 唐カラのカ洞ツツのカ枝エたタらラぬヌつツらラぬヌ法ホウ

茶チヤ籠カゴをカのカ口クチらラぬヌ又マ水ミヅ入イのカ座ザらラぬヌとカ敷シたタらラぬヌ  
志シ中チユウのカ箱ハコ四シ角カク 志シ中チユウ入イ火ヒのカ箱ハコをカ入イるルつツらラぬヌ  
箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ又マ水ミヅ入イ  
まマるルつツらラぬヌのカ内ナにカつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ

はハ丹ニ金カネ方カタぬヌ袋フクロはハ丹ニ金カネ方カタぬヌ中チユウにカつツらラぬヌ  
もモろロのカ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
とト引ヒけケぬヌのカ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
ふフるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
のカ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
らラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
めメはハ丹ニ金カネ方カタぬヌ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌ  
○ 木キはハ丹ニ金カネ方カタぬヌ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌ

木キはハ丹ニ金カネ方カタぬヌ箱ハコのカ内ナにカつツらラぬヌ  
とト申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
とト申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
とト申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ  
とト申マシるルつツらラぬヌとカ申マシるルつツらラぬヌ

づつとくちやうとてしまふらう——つとくち又かゝつら  
そいふでしはわさ

勿論 礪石 礪石 礪石 と称し——あつてこれ合抽つぎめ  
とよりしりしそ——あつてしりしそよなり又此穴  
とつとくちやうとてしまふらう——つとくち又かゝつら  
そいふでしはわさ

○彫物など金銀をちりちりするもの

彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物  
あつてしりしそよなり又此穴  
とつとくちやうとてしまふらう——つとくち又かゝつら  
そいふでしはわさ

らくあつてしりしそよなり又此穴  
とつとくちやうとてしまふらう——つとくち又かゝつら  
そいふでしはわさ

○彫物など金銀をちりちりするもの

彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物 彫物  
あつてしりしそよなり又此穴  
とつとくちやうとてしまふらう——つとくち又かゝつら  
そいふでしはわさ

○彫物など金銀をちりちりするもの

紅く染む海におとりしは ~~...~~ スミトハ青梅とむし  
草の葉ハ黄栌 <sup>キワダ</sup> 赤花 二色まで染むる水打ら  
むいぬる瓶を引たり

○ 四羅春板屋の織物の色

ま葉汁の後のあけける竹のたぬまに唐紙を打  
つやあかりしを織りぬる唐紙の板まがかり

○ 茶碗の彩色の法と後行の法

碇子と磁粉よりして行ふも法がいにしや茶碗は蓋と  
あくらより七火入れの如き磁器に入上を瓦で蓋とし  
はとくつをなほ山灰やうで後行ししるは法竹やあ  
かり ビイドロロクズが子やニアリ

○ 蓮の白い染り法

丁子の油 蒸 草花 梅も 桜花  
太白のときろくにん酒の中へ入ると白いとわし  
ひき入しあらし

○ 木下をまか金物おのり紙を染むる法

水弱とまのこや二不介の水につけよりぬれはる紙に

○ 磁器のこしをまかす法

磁黄 <sup>ケイロウ</sup> の粉とつげくし息らひぬる

○ 茶のうらなをまかす法

挽茶とせしむる紙の口へ入つておのりを御して  
べんも強水中にお入らぬやうにして

きりぎりす——十の半のなかのいしりい

○ 衣服にゆるまの脂のけいり

衣服にゆるまの脂のけいり

○ 水とこまきとて文をいじりし法

明礬石 小豆 黄蘗 右ニ味細末布り給ふ

そと水とて——紙のこまきの包いり物とていじりし法  
お——あつちいりし法とていじりし法  
お——水とていじりし法とていじりし法  
お——水とていじりし法とていじりし法  
お——水とていじりし法とていじりし法

○ 似層石ズリノ法

一 膠一々 明礬石一々 入てとれえれを以て層紙よ

文のまじりし法とていじりし法とていじりし法  
て紙のまじりし法とていじりし法とていじりし法  
流しとていじりし法とていじりし法

○ 石印彫りノ法

輓名のまじりし法とていじりし法とていじりし法  
石とていじりし法とていじりし法とていじりし法  
おけつらこ世中にまじりし法とていじりし法  
字に書けらるる法とていじりし法  
糊と竹抄のまじりし法とていじりし法  
おけつらこ世中にまじりし法とていじりし法

お神とめくりよりしとすわりの細くえのちがひあるを  
ひく彫る佛師ハカミ又大町の  
珍好をみるに先とて彫る伝授に後を重なる好してるぶ  
又字と直し一なりとて主押てんと思入と決し決す  
の極まゝ鬼角のつとて入るやいりあを古くあつ決  
するやうに決するなり

○ 秘傳唐糸原因の法

草麻子カサマシは皮とていけ  
いりつこのおまるとの糸のまがせと白鳥からびけに浸  
しまじよに糸とてるぶして一毎の色サしうるや  
お押て糸初伝るらば

お又秘伝より 鯉の鱗の干るとおしそとわきまが  
入まぶし一歳年と唐糸を乾くるなり 一鯉の鱗  
こ入りより秘中の秘なり

○ 万續物業の法

温飩ウダンの粉を水でこくと煮る石灰の細葉  
搗合を主燈のこせりめり物等とて一切つぐ  
又法錦印白こふ石原をせそより物業とつぐ  
○ 一里一寸信松の法

稀蒼サイミ空をぬぐ搗碎ウツをなむしせけと見ド  
鹿の角を倒サカミこまぶる熱し入用なりそよおと熱  
どししきよ一とて思ふなり

○ 疣之瘡をやくとまは

一 南天ノ木 南天ノ葉 南天ノ実

右ノ三葉をてんぐーほふいじぐーぬ百のいぬ減るの瘡

を瘡瘡より

又佐土二月八日に鶴の卵ニハトクノタマゴなりそ卵の中へ蛇刺ヒナヅとツツ

はひく入る卵と卵の中をわきいじぐーの卵をとり

むしはるとむしは蛇刺とをまてい食をすし鶴卵

とわし今もまていしし瘡をりやぶる人に食を

むしはむしはむしは

○ 疣をやくとまは

一 男女ともにあふまふのいふとぐくとはあては家野アセムの

卵の白とをたぬる強らばぬるまてし乾くにいたる

不ろくとあまらとすしもつるびりと鷹とくか

ふの如くあまら

○ 同卵とすしを

一 白粉シク十斗 蛇骨ニク くらやみカク 高根タカネ さい

名細葉して大い人のほりけりてとれ髪ハツケ毛の平なる

くらやみへ付とすし

○ 疣瘡をやくとまは

一 松茸の石づきシクの割みホイロにわしかけ粉すし

そこと湯に振りむしはむしはむしは

○ 男女ともに髪をまてし

結髪ムスビとすし



一 麻の葉 葉ノ葉を煮かきとす一常にほろぼす

○ 同 煮かきとすよくよる法

一 桐の木の皮を煮くしほろぼす一極よくするこ

○ 髪を煮かきとすの法

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

大いりまの汁 三盃 生姜の汁 一盃

右二色の汁一つよして椰子の油を盃入して厚層を  
能くげんに焼くもをせぶ

○ 好友を生かす

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす  
今も髪を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす

○ 鹿ノ角を煮かきとす

一 鹿の角 鹿ノ角を煮かきとす一常にほろぼす



蜂ホノ防妻あは中ら兵軍中白子ら箭の難盜賊の害  
 と降く漢の冠軍將軍武威成る守劉子南尹公と云  
 道子ニ此方と受て得たり永平十二年北界ありて曹賊と  
 戦ひて劉子南軍敗て士卒略盡り劉子南敵よ困れ  
 四言分矢と射るるもの如し然るとも矢劉子南が業くる  
 馬より駑馬と弱く地は陸一帯も中に中ら兵強國と  
 のれ去ル曹賊終る禱ありと云ふも存劉子南此を  
 子南、老中は軍中の大将とあり曹賊傷と被らば  
 漢の末、青牛道子此方とあり白王南南隆も存る白王  
 南隆は内魏の武帝も存る一名冠將九又武威成九  
 と名く

螢火

鹿箭羽

蔗菘菘

各一丈

雄黃

雌黃

羚羊角

燉て

白礬

燉て

鐵錘柄

但鉄入寒

右細末

鷄子黃

丹雄

鷄冠

まじりて煉り合杯を

千斗もつて杏仁のすりこ三々角九ト総計ノ製り  
 五粒入一常に右ノ臂ノ上ニ括り符をまじり軍中ノ左  
 腕ニ繫るる家ノ口ニ括り符ノ上ニ括り符をまじり盜賊と  
 してけし害あり一右邪仙感應の節よおしり

○ 食むべしと不飢方

胡麻

唐栗

寒晒餅米

七匙

太粉

○

そのどにぬ一日二粒づゝる

○ 秘傳掌中炬の法

樟腦 百目

塩脂 七五斤 硫黄 六斤五斗

麻灰 二分

右焼酎を焼く方丸を煮る。最上の水晶の玉を中  
とくりけ茶丸を煮る。中入持し一丸二三里を  
照らす。のりもいれん。煮る。煮る。煮る。

○ 一かゝ臭骨はけい法をわらわぬ

麩と煮る。いれ。水は。湯は。が。じん。と。煮る。一。煎。し  
首。の。わ。ら。わ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

○ 合おる。破。と。結。の。や。

膠。を。表。表。より。つ。ぎ。合。合。金。銀。越。して。た。く。さ。干。し。ぬ。ぬ。と  
ぬ。り。て。す。い。ら。ん。ど。ぬ。ら。ん。ど。ぬ。ら。ん。ど。ぬ。ら。ん。ど。

○ 後。の。形。を。磁。乃。よ。ぬ。る。と。法。法

鵝卵の白みに温鈍の粉を研ませつぐ。

○ 赤銅のありくぬる黒くする法

右布の油とつげ。も。と。と。硫。黄。を。攪。る。一。是。也。

○ 銅とあぐ大の色をよめる法

赤銅と大の油を煮る。い。ら。ん。ど。熱。湯。を。い。ら。ん。ど。こ。こ。ら  
い。ま。その。火。に。ぬ。ら。ん。ど。熱。湯。の。中。入。る。一。赤。く。なる。なり

○ 樟胞と久しく煮る

樟胞と釜。六。口。と。す。く。煮。り。て。う。つ。む。け。い。ま。づ。一。減。ら。ぬ。なり

○ 煮黒めの法

硫。黄。百。目 合。て。お。き。す。ら。ぬ。い。ま。づ。け。者。なる。り

右。所。の。質。を。わ。ら。ぬ。け。ぬ。入。ら。ぬ。赤。く。ぬ。ら。ぬ。なり

浸すてハチヂ〜とぶ〜色分

○ 大小の柄はびりや

糸柄も七草柄も七密地係と筋を包みサ〜  
めり引ぐ〜え柄も〜るまぬしよの口まぶらげ色  
〜らび〜す〜外の神かりる〜

○ 毒は向ふと知る法

湯茶酒をどの向い掛るげうらび毒有りと知る

○ 水中と澄す法

生肌あかかき〜  
一乳香うま 一松脂かま  
二嵐あらしの薫かハチ 一板の脂あし 一燈油あぶらとぬの目め〜  
〜とまきりせまた砂り目鼻に耳にぬり水〜

あやま〜く眼く〜水サ〜も目〜カ〜

○ 目よ物の入るとちま法

袖ノ襟えりと黒鏡〜〜サ〜ちの〜の〜〜ち〜

○ 鴉カ又ガぬ〜茶

六月むいは藜あしと丸黒鏡〜して石房いしむらの礎いし石と此こゝニ味あじ合あを毒  
入いれれとち〜〜入いれれ〜縁えり糸と入いれれ〜冬ふゆハ  
寛あまの〜〜を糸とち〜竹たけ花はなと鴉カ又ガと〜  
血ちと〜〜とち〜海うみと〜〜  
〜

○ 水銀すいぎんと毒〜と〜

〜と〜と毒〜と〜金かねの〜と〜



又乃草芥解一凍草の如く見ゆべし肺を清くし

。咽喉腫やぐり呼吸をば充足とすを治す法

一 蒿苳の根と馬糞とを煮て若く碗をこきよめて細末に

管と吸くのとに吹入ぐり一せ草の毒を消すのどを清く

し候所を呼吸せしむるべし凡のどを清くするは尤急

の疾也他乃草とていりやうに速に治すべし此薬を百

人と稱すは海井乃神也(鼻) 鼻腫れ出せしむ

とすめ若くし人よりいせきと吹入れ候所也

なりやめとすべし

○ 鼻と喉を治す法

一 赤り押乃葉と蔞干とを細末にす若く碗をこきよめて

を信合交されば鼻と喉を治す法

○ 胡臭を治す法

一 白銀青を煮して粉とす若く碗をこきよめて

○ 一切の草を煮て粉とす若く碗をこきよめて

山梔子とてんじろを煮て粉とす若く碗をこきよめて

○ 河豚の毒を治す法

一 生肌と粉とを煮て粉とす若く碗をこきよめて

○ 耳だれを治す法

一 鯛の鮓と玉糞とを煮て粉とす若く碗をこきよめて

○ 燈を治す法

一 干葉と粉より〜〜〜

○ 日 法

一 生キレグとちび〜〜〜

○ 人喰大と退る法

一 我の寛い〜〜〜

一 大の天指より〜〜〜

○ 疱瘡と〜〜〜

一 南を〜〜〜

一 枕の争〜〜〜

○ 梅花と黒く〜〜〜

一 若ロシダシ様の樹キが〜〜〜

○ 冬鏡フシの影〜〜〜

一 かの甲カウ破ハ村と〜〜〜

一 おく〜〜〜

○ 舟の中〜〜〜

一 生の悲ヒのけと〜〜〜

○ 風フウと〜〜〜

一 木を〜〜〜

一 おと〜〜〜

一 落く〜〜〜

○ 昔コト者モノ氷ヒり〜〜〜



一 鄭淵之命 轉をわらふたれば 漢學又ハ 學問の事  
考る中へ ところてんを 四角に 切りちり ちりちり  
。

○ 湯入を乃かえりてを法

一 ぬいすき 釜へ 水魚を ちりちり 入れ 水と 一ひん  
だく 。

○ 人をしりて 美人とあそむる法

一 土瓶根と 細末にして 瓶の水を ちりちり ちりちり  
つりて 。

一 七つちりちり 茶人との ちりちり  
瓶の中へ 水入の中へ 赤ぶと 入りき ませ 座より つり  
よのちりちり

○ 夜道を行つ時 ありて なるが ちりちり

一 中位の 竹の 上へ ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
中へ ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

○ 抱の 貝を せりて ちりちり ちりちり

一 抱の ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり  
ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

○ 材木 席を ちりちり ちりちり ちりちり

床柱を多くとちり四角のけりまてるよりせ能ひやい扇  
のえと多くありめりつ灰の上より少くと薛コトをえととせ  
と覆フクレの一夜とやいふ人化して馬ウマをえと合入の  
て場ウマに沸フケ——のよりの場の中あまをくくまらるる  
木和らぬぬくはれをせ成ナおそく徳トクびとせむの  
べし

○人形の眼より走りおそく

胡粉コの毒ドクひきとよりせいで眼を彩色したる走り

○猫の眼を十三町と智チる

哥カ 六九く四ハハのまマとせし  
多きいなりませぬ針チ

○小便とス——くらくら法

小便とス——くらくら法  
小便とス——くらくら法

○蠟燭と空カラよつる法

ろくをくし——くらくら法  
蠟ロウ燭ソクと空カラよつる法  
今一尺のちと茶のむをらへにつまんで火をとりす  
て蠟燭中よせしめり

○白磁乃シラガまにまの早ハヤくおまぬマ

油アブをいし極キョクくまのいとちとめし地チと編ヒく反サカち  
とササ—まなりしに包み埋ウマまし口クチを問トありてまの反サカち

子雲と指してとりてふれい書師とてあれて指すつゝあり  
未だ書くあれどあつた又も修理主とて書師よよれり  
あつたあつた一能くたう水もよよれり  
しつゝあつたあつた

供わらた乃及右と指しててあつた

○ 黙炭一法

炭十斤 鉄屑十斤 榴石粉とあつた生蓮葉三斤 粉と  
右の月入を海草をそり形を化し乾しかあつた  
用ゆりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○ 花籠<sup>ヒシ</sup>返破<sup>イテワシ</sup>する法

- 花籠の中を洗うにこれるもの有壇乃灰と花籠の底を  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
- あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
- あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



引ぐー一土の庵よりなりて上の御守りにて  
此世と命提行より引ぐー一り遊赤なるるひり

○ 庵を切ると扱ふた

庵のなかサ第行をたんとくまらぬと切り上の黒はとつぎ拾  
中の知らぬあるはをともりたして換の<sup>ニキ</sup>灰<sup>ニキ</sup>と扱灰<sup>ニキ</sup>  
着合せどもあつて濃がらげりよ干して<sup>ニキ</sup>灰<sup>ニキ</sup>乃  
かく拾<sup>ニキ</sup>一又庵を切く黒はをたよらぬ<sup>ニキ</sup>灰<sup>ニキ</sup>乃  
してはとつぎ<sup>ニキ</sup>灰<sup>ニキ</sup>乃かく拾<sup>ニキ</sup>一

仙家秘術 大尾

